



蘇る一瞬 みとよ写真帳 page 21

このコーナーは、文書館に保存している古い写真を皆さんに紹介します。



**懐かしの1枚**  
志々島の除虫菊  
昭和45年(1970)年頃  
詫間町

農家で一般に除虫菊が栽培されるようになったのは、明治40(1907)年頃からである。除虫菊の栽培には、日当たりの良い傾斜地が適しているため、志々島や栗島、荘内半島で多く栽培された。開花の季節には島や荘内半島が真っ白になったという。

「想い出の1ページ」

「昔はようけ作ったなあ」と懐かしそうに話すのは、現在、志々島で唯一花の栽培をしている高島孝子さん(79)。

「除虫菊を中心にとっからしや麦なんかも作ってたから、学校から帰ったら即手伝いでした。結婚してからは早朝から漁業、海から上がると農業の毎日でした。畑は散在していたから、農具とか持って移動するだけでも大変。何往復もしよったな。写真にはまだつばみのものが見えますよね。普通に出荷する花は8分咲きくらいで出すんやけど、除虫菊は咲き誇ってから出荷の準備を始めるんよ。根から抜いた後、白い花の部分だけを取って、乾燥させて出荷していましたね。」

除虫菊の肥料としてよく使われていたのが、海藻でした。夏になると毎日、主人と一緒に高松の方まで取りに行きよったわ。船が沈むくらいこれでもかかって取ってくるんよ。帰りに大きな船が横を通ると怖かったことを覚えるなあ」

その後、志々島では菊やマーガレット、キンセンカなど観賞用の花の栽培が盛んになります。「除虫菊の時は真っ白の島、花が変わると島のつべんまで

色鮮やかな島やったよ。それはもうほんまにみごとやったなあ」  
高島さんの自宅には、島全体が色とりどりの花で埋め尽くされ「花の島」と呼ばれていた当時の写真が数多くありました。  
「もういっぺん色鮮やかな島の風景を見てみたいな。花は、この島にとっかけがえのないものやったからね。これからも大好きな花を作り続けていきたいね」



**ま** ちづくり推進隊の皆さんを取材して感じたこと。みんな元気！パワフル！何でだろう？それは、たぶん、楽しみながらやっているからではないでしょうか。やりたいことをやる。楽しいから長続きする。それを見て「私も」と参加する人がいる。そして、それが地域の活性化につながっていく。これって、すごく大事なことだなあと、改めて感じました。皆さんも、ぜひ自分のまちの推進隊をのぞいてみてください。きっと、元気をもらえます、すてきな出会いがありますよ。